

伊達成実

だてしげかね

南相馬に来たる

北の大地に共存する相馬と伊達

平成30年

6/30 | 土 |

▶ 8/19 | 日 |

宿敵・ライバルとも称される相馬と伊達ですが、相馬が誇る伝統行事・相馬野馬追の時期に、北海道伊達市から戦国武将・伊達成実が南相馬にやってきました。

成実の子孫・亘理伊達家は明治維新後、家臣・領民と共に北海道に移住・開拓し、現在の北海道伊達市の礎を築きましたが、近年、伊達市で当地方の伝統行事・相馬野馬追を描いた「奥州相馬氏野馬追図屏風」(伊達市教育委員会蔵)が発見されたり、伊達成実所用の甲冑の補修を本市の甲冑師が手掛けるなど、少しずつ伊達市との地域を越えた交流が始まっています。

伊達成実

永禄11年(1568年)、信夫郡大森城(福島市)主・伊達美元(伊達植宗三男)の嫡男として生まれ(幼名:時宗丸)、天正7年(1579)元服し藤五郎成実を称する。天正12年(1584)家督を継ぐと、同年に家督を継いだ伊達政宗の片腕として尽力し、政宗の南奥羽制覇に貢献、二本松城、角田城の城主となった。猛将として名高いが、調略にも長けた知勇兼備の人物だったとされる。

慶長3年(1598)一時出奔するものの、同5年(1600)に起こった慶長出羽合戦(上杉対最上・伊達)に際して政宗のもとへ帰参した。同7年(1603)亘理(宮城県亘理郡亘理町)を拝領、以降は所領の開発に励みながら、仙台藩主の政宗・忠宗2代の補佐役として藩の振興に尽力した。

正保3年(1646)79歳で死去。菩提寺は大雄寺(亘理町泉ヶ入)。



成実所用の甲冑(右)、成実霊屋に納められた木像(左)の兜にみられる毛虫をかたどった前立は、「後退しない」という毛虫の習性にあやかるものと伝わる。

伊達成実木像(上)
伊達成実霊屋(下)

宮城県指定文化財
亘理町・大雄寺

写真提供:亘理町立郷土資料館



黒漆五枚胴具足 伊達成実所用
伊達市教育委員会蔵

経年による傷みがあったが、近年南相馬市内で補修された。

相馬家と伊達成実

戦国時代、当地方を治めた相馬家は、領地を接する伊達家と幾度となく抗争を繰り広げました。とりわけ伊達成実に着目してみると、相馬義胤(相馬氏16代)と天正13年(1585)の人取橋の戦い(本宮市)で対陣している絵図はありますが、戦国時代の成実は大森城や二本松城の主として、おもに仙道筋(福島県中通り地方)の領国経営に比重を置いていたのか、相馬と直接戦ったり、積極的に関与する記録は多くはありません。むしろ相馬方の「相馬如雪」という人物から和平交渉のため成実に書状が送られるなど、相馬は伊達との交渉ルートとして、成実を介していたことがうかがえる史料が残っています(『政宗君記録引証記』)。

亶理伊達家

伊達成実は、慶長7年(1603)伊達政宗より亶理を受領し、亶理郡をはじめ伊具郡、宇多郡ほかの村々を治め亶理伊達家の初代となりました。亶理伊達家は首席の石川氏に次ぐ仙台藩一門第二席として、家臣のなかでも別格扱いを受ける家格で、成実^{あきまさ}は藩政の補佐役、時には藩主名代までつとめる重臣として活躍しながら、亶理の町作りと治水・開発につとめ、30代半ばより79歳で死去するまでの40余年、亶理を本拠に生活しました。

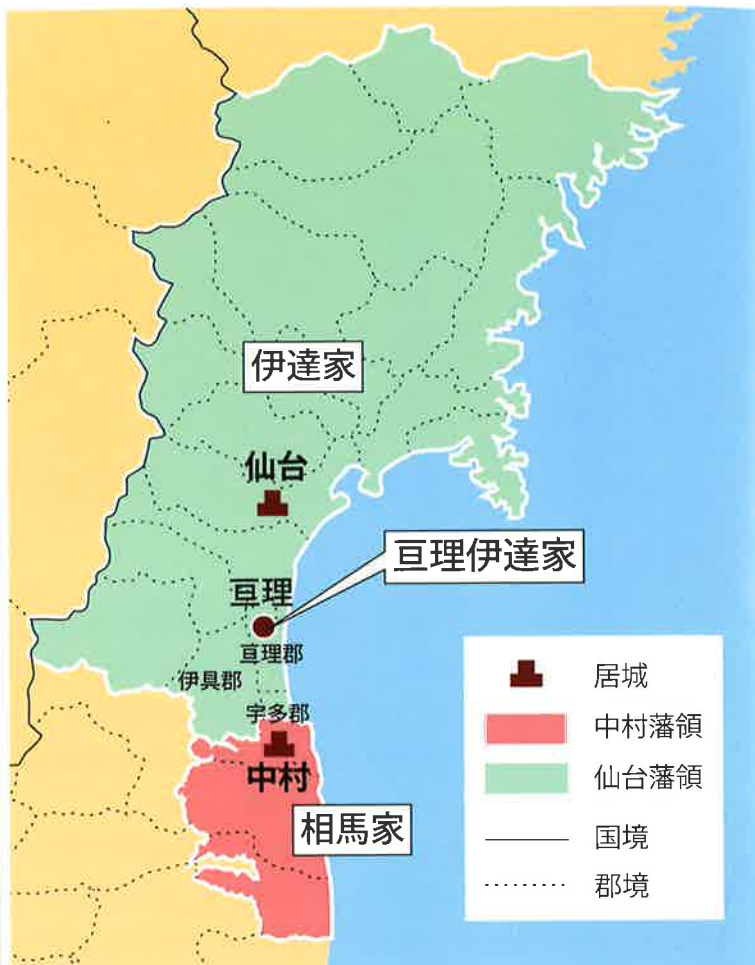
成実の跡を継いだ宗実(伊達政宗九男)以降も、2万4千石あまりを知行し、重鎮の家柄として藩政を支え続けました。



亶理要害(亶理城)跡 宮城県亶理郡亶理町旧館

写真提供:亶理町立郷土資料館

亶理伊達氏の本拠。鎌倉～室町時代まで亶理を治めていた亶理氏が築いたとされ、その後、片倉景綱、伊達成実へと引き継がれた。江戸幕府の一国一城令により、仙台藩では居城の仙台城と、例外的に認められた白石城をのぞく領内の城砦を「要害」と称し城と区別したため、亶理城は亶理要害と称された。江戸時代には、仙台藩内には20を超える要害があった。



江戸時代の中村藩と仙台藩

伊達成実が亶理を受領以降、亶理郡をはじめ周辺の伊具郡・宇多郡ほかを所領し、相馬家が治める中村藩とは藩境を接する関係となった

北海道開拓の先覚者

慶応4年(明治元年・1868)の戊辰戦争で、仙台藩は新政府軍と戦ったが、亶理要害の地で降伏し敗北、藩領地を大幅に削減されました。亶理伊達家も支配地のほとんどが没収され、多くの家臣たちが禄を失いました。

15代・伊達邦成^{あきまさ}は、家老・常磐新九郎(田村顕允)の意見を取り入れ、家臣たちの生活の救済・新天地での再興を目指し、北海道移住・開拓を明治政府へ願い出、明治2年(1869)胆振国有珠郡(伊達市周辺)の開拓が許可され、翌3年(1870)から14年(1881)まで、9回に分けて約2700名の移住が行われました。

厳しい気候のなか、慣れない火山灰質の広大な原野の開墾は困難を極めました。全国に先駆けた西洋農具の活用、畜力農耕の導入、甜菜^{てんさい}など商業作物の生産などが軌道に乗り、これらの施策は北海道開拓の見本として称えられ、邦成は明治25年(1892)男爵に叙せられました。



伊達邦成
(1841~1904)

写真提供:伊達市教育委員会



太刀 宇佐美長光

国重要美術品 鎌倉時代中期 銘「長光」

伊達市教育委員会蔵

亶理伊達家に伝わる太刀。伊達氏14代稗宗の子・実元(成実の父)が、上杉家に養子入りする話が出た際、上杉家から「竹に雀」紋とともに贈与されたものとされる。養子入りは立ち消えとなったが、竹に雀紋と太刀は上杉家に返納されず、伊達家側に残った。太刀は仙台伊達家に献上され重宝となっていたが、明治25年(1892)に亶理伊達家に返納されたと伝わる。

伊達で発見された相馬の屏風 『奥州相馬氏野馬追凶屏風』

『奥州相馬氏野馬追凶屏風』は平成24年(2012)伊達市で発見されました。亙理伊達家に仕え、明治時代に北海道開拓・移住に同行した家臣の子孫の家に残っていたもので、亙理から北海道に渡ったものと思われます。

亙理伊達家の史料(『亙理世臣家譜略記』『半沢家文書』)には、8代伊達村実(1721～1757)が、絵の腕前を持つ家臣を数年間にわたり隣藩の中村藩に派遣し、野馬追の絵を描かせていた記録があり、中でも亙理伊達家中の斎藤新造(生没年不詳)は、命を受け6～7年間にもわたって通い、野馬追行事全体を見取り、屏風として村実に差し上げたとのこと。この屏風はそのとき(18世紀初め～中頃)に描かれた可能性が高いものです。

『奥州相馬氏野馬追凶屏風』

六曲二双 江戸時代 伊達市教育委員会所蔵

江戸時代の野馬追の3日間を描いた屏風。

屏風は4隻からなり、1日目の「御繰り出し・宵乗」から、2日目の「^{おくだよりの}駆引」「野馬追」、3日目の「^{よいのり}野馬懸」までを順序良く詳細に描いています。

1. 「御繰り出し・宵乗図」

野馬追1日目、右下の中村城下(相馬市中村)から中村藩主・相馬家の旗本組(藩主直属の組)の行列が繰り出し、真ん中の左下部に描かれた原ノ町宿(南相馬市原町区)に宿陣し、直線の浜街道を馬場として行う調馬訓練「宵乗」までが描かれている。

2. 「駆引図」

野馬追2日目、原ノ町宿の南側に広がっていた牧「野馬追原」で行われる訓練「駆引」を描いたもの。

駆引は騎馬武者・徒歩武者・足軽らからなるいくつかの「備」を陣立てし、それを軍学に基づいて縦横に動かす訓練のこと。

3. 「野馬追図」

野馬追2日目、駆引の終了後に行われる「野馬追」を描いたもの。

野馬追とは、現在の原町区市街地に広がっていた牧場・野馬追原に放牧された、神前に奉納するための「野馬」を「追う」、文字通りの行事。右側に描かれた備の中から騎馬武者が飛び出し、野馬を追っているようすがわかる。

4. 「野馬懸図」

野馬追3日目、小高妙見社(南相馬市小高区/現相馬小高神社)で行われる「野馬懸」を描いたもの。

前日の「野馬追」で追われた馬は、小高妙見社境内に設置された竹矢来の中に追込まれ、3日目、小人(こびと:藩主の雑用などに従事する武家奉公人)によって素手で捕らえられ、妙見社の神前に奉納された。



1. 「御繰り出し・宵乗図」



2. 「駆引図」



3. 「野馬追図」



4. 「野馬懸図」

伊達に息づく“相馬”

相馬と伊達といえば、宿敵・ライバルなどと称され、対立構図で語られるイメージがありますが、互理伊達家が築いた町・伊達市には先に述べた野馬追屏風が残っていることに加え、ライバル同士の名字を冠した「伊達神社」と「相馬神社」があります。言わば相馬と伊達が“共存”しているのです。

伊達神社は伊達市開拓に尽力した伊達邦成らを祀る神社で、相馬神社は馬の守護神として、大正時代に当地方の太田神社（南相馬市原町区）が分霊された神社です。両社は伊達市の市街地にあつて、秋の例大祭は近隣の人々でにぎわうお祭りとして知られ、両社とも市民に親しまれています。相馬地方から見れば、相馬と伊達が、このように違和感なく共存している光景は、とても新鮮に映ります。



伊達神社 伊達市末永町



相馬神社 伊達市大町



太田・小高神社 伊達市東関内町



伊達神社	伊達邦成が北海道移住後、開拓・鎮護の守護神として互理にあった鹿島天足和気神社を分霊し、明治9年(1876)鹿島国足神社として遷座。昭和10年(1935)有珠郡開拓の偉業をなした伊達邦成と田村顕允を神として合祀、伊達神社と改称し現在に至る。
相馬神社	明治41年(1908)札幌市豊平に建立された相馬神社(太田神社分霊)の胆振支庁事務所として、大正10年(1921)に設置され、同12年(1923)、社殿が造営され現在に至る。
太田・小高神社	創建の時期・由来等は不明だが、扁額に「相馬妙見」とあるので、当地方から分霊されたのは間違いないと思われる。伊達市内の相馬神社と関連があるものと思われる。

北海道の相馬神社～馬の守護神として～

伊達市のみならず、北海道には「相馬」あるいは「妙見」「太田」「小高」「中村」などを冠する、当地方の相馬三社(太田、小高、中村神社)ゆかりの神社が広く分布しています。これらは明治時代以降、北海道開拓の労働力として必要だった馬の守護神として、当地方から分霊されたものがほとんどです。

当地方の領主相馬家は、弓矢の神ひいては領内の守護神として妙見を祀り、神馬をささげ領内繁栄と安寧を祈願する行事として野馬追を続けてきました。明治時代以降、相馬家の守護神だった妙見は、馬にゆかりの深い野馬追に関連して、馬の守護神としての性格が強まり、馬を飼う農家や博勞(牛馬の仲買人)らの信仰を集めました。

その信仰は三社の信仰圏外にも拡大、とりわけ馬の需要が多かった北海道に広まり、加えて日露戦争の最前線だったこともあり、兵馬の神にもなりました。文献(『北海道神社庁誌』等)で確認された、道内の相馬神社関連の社祠・石碑などは60か所弱にもおよびます(佐藤祐子氏調べ)。



北海道内の相馬神社関連施設(社祠)の分布

佐藤祐子氏作図